

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	1	共通科目 必須【博士後期課程】
担当教員			
小林 康孝・林 浩嗣			
講義			
添付ファイル			

授業の到達目標及びテーマ	保健医療学についての理解を深める 保健医療学に関連する問題の認識と解決のための知識を習得する
授業の概要	保健医療学は、人々の生涯を通じての健康管理を補助し、疾病時には早期の健康回復を促す為の最適な援助方法を研究する学問、つまり人々の健康を維持・向上させるための方法を実践的に提供すること目標とする学問である。また、生涯を通じて健康的な生活を送るには、日常生活のみならず社会生活を活動的に送ることが必要となる。現在、就労人口の減少により、障害者や高齢者が働ける社会の実現が求められており、障害者や高齢者の就労支援に対する取り組みは、保健医療分野においてこそ取り組むべき課題である。 この保健医療学特論では、保健医療学の重要性と役割、およびそれを実践する上で考慮すべきリスクと、その基礎となるリハビリテーションと看護の融合・展開について、プレゼンテーションやディスカッションを交えて学ぶ。 (オムニバス方式/全8回) (小林康孝/全4回) 保健医療学の重要性やそれに伴うリスク要因、障害者や高齢者の就労におけるリスク要因について学ぶ。 (林浩嗣/全4回) 保健医療学におけるリハビリテーションと看護の融合とその展開について学ぶ。
授業計画	第1回 保健医療学の重要性と役割 (小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習 第2回 保健医療学を実践する上でのリスク要因 (小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習 第3回 保健医療学から考える障害者の就労支援におけるリスク要因 (小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習 第4回 保健医療学から考える高齢者の就労支援におけるリスク要因 (小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習 第5回 保健医療学におけるリハビリテーションと看護の融合とその展開Ⅰ (連携を考える) (林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習 第6回 保健医療学におけるリハビリテーションと看護の融合とその展開Ⅱ (業務の相互補完を考える) (林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習 第7回 保健医療学におけるリハビリテーションと看護の融合とその展開Ⅲ (社会生活支援に対する業務を考える) (林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習 第8回 総括討議 (林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習
テキスト	特になし 毎回資料を配布する。
参考書・参考資料等	特になし
学生に対する評価	プレゼンテーション (50%)、ディスカッション (50%)
課題 (試験やレポート等) に対応するフィードバックの方法	在室時はいつでも対応します。メールでの対応もします。 講義中および終了時に適宜返答します。
備考	

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	2	共通科目 必須【博士後期課程】
担当教員			
小林 康孝・堀 秀昭・川端 香・吉江 由加里			
講義			
添付ファイル			

授業の到達目標及びテーマ	共生社会における組織の運営ならびに対象者の障害受容及び就労支援など、生活支援が実践できる地域連携推進者として必要な能力を修得できる。
授業の概要	<p>概要) 地域包括ケアシステムの確立と維持に向けて、幅広い観点で対象者の障害受容及び就労支援に取り組むための生活支援に関する理論を理解する。具体的には職業準備ピラミッド等である。また、地域リハビリテーションにおけるマネジメントの概要を理解し、連携推進者として必要な能力を培うことを目標とする。(オムニバス方式/全15回) (オムニバス方式/全15回) (小林康孝/全6回)</p> <p>SDGsの目標達成に向け、障害者が積極的に社会に参加・貢献できる共生社会を実現させるために、医療者にとって必要な支援方法について教授する。さらに、高次脳機能障害者の支援の実際を例に、グループワーク形式の議論を行う。</p> <p>職業準備性ピラミッドにおける対象者の健康管理と日常生活管理に必要な知識と実際について、主に障害者の服薬管理や症状管理を含むセルフコントロール等について教授する。また、チームマネジメントを高める方法について、ファシリテーション技法や多様な対話手法について教授する。 (堀秀昭/全3回)</p> <p>超高齢化社会を迎え、SDGsの目標達成に向け健康寿命の延伸が叫ばれている。高齢者が元気で長生きし、積極的に社会に参加・貢献できる共生社会を実現させるために、医療者にとって必要な支援方法について教授する。さらに、「自助」「互助」の考え方を含めた介護予防の実際の例を、グループワーク形式の議論を行う。 (川端香/全2回)</p> <p>障害者や高齢者が社会の中で役割を果たすための支援の視点として用いられる、職業準備性ピラミッドの考え方をもち、地域での社会復帰支援を統括的にマネジメントできる能力を身につけられる様、その内容を教授する。また、ピラミッドに含まれる対人技能と基本的労働習慣、職業適性に関しては、その評価方法について実例を用いて議論する。 (吉江由加里/全4回)</p> <p>地域包括ケアシステムにおけるリハビリテーションの概念及び地域リハビリテーションのサービスとその特徴について教授する。また、リハビリテーションの質改善におけるエビデンスの活用に取り組むための方法を教授する。さらに地域連携推進者育成に向けて、組織マネジメントの基礎知識とコンピテンシーとその育成方法について教授する。</p>
授業計画	<p>第1回 地域包括ケアシステムの日本における政策的・制度的経緯(吉江) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第2回 職業準備性ピラミッド(川端) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第3回 対象者の健康管理と日常生活管理に必要な知識と実際(小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第4回 対象者の健康管理と日常生活管理に必要な知識と実際(小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第5回 対象者の対人機能と基本的労働習慣、職業適性(川端) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第6回 高齢者の就労支援や介護予防支援(堀) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第7回 地域とのつながり：福井県リハビリテーション支援センターの概要と機能(堀) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第8回 グループワーク：高齢者支援の実際(堀) (事前・事後学修) 事例に対して専門職としてどのように対処できるかグループワークを通して学ぶ</p> <p>第9回 障害者の就労支援(小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第10回 地域とのつながり：福井県高次脳機能障害支援センターの概要と機能(小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第11回 グループワーク：高齢者支援の実際(小林) (事前・事後学修) 事例に対して専門職としてどのように対処できるかグループワークを通して学ぶ</p>

	<p>第12回 リハビリテーションの質改善におけるエビデンスの活用：PICO、IOWAモデル（吉江） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第13回 マネジメントの基礎知識：マネジメントのための「基軸」、意欲のマネジメント、および地域連携推進者としてのマネジメント（吉江） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第14回 地域連携推進者育成に向けて、組織マネジメントの基礎知識とコンピテンシーとその育成方法と意欲づけの連動性（吉江） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第15回 チームマネジメントを高める技術と評価（小林） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p>
テキスト	特になし 毎回資料を配布する。
参考書・参考資料等	
学生に対する評価	<p><講義形式> 講義毎にレポートを提出し、その内容を基に評価を行う（80%）。</p> <p><グループワーク> 成果発表の内容に対する教官とのディスカッションを基に評価を行う（20%）。</p>
課題（試験やレポート等）に対応するフィードバックの方法	在室時はいつでも対応します。メールでの対応もします。 講義中および終了時に適宜返答します。
備考	

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	2	共通科目 必須【博士後期課程】
担当教員			
塩見 格一・猪口 徳一・米田 誠			
講義			
添付ファイル			

授業の到達目標及びテーマ	研究デザインに必要な幅広い知識（研究倫理、生命倫理、研究公正、計画立案、研究費獲得、研究成果の発表と公表など）を習得し、独立した研究者・指導者として責任ある研究活動を行う能力を身につける。		
授業の概要	<p>概要) 研究をデザインする上で必要な知識を学修し、研究倫理・研究公正に基づいた適切な評価・判断能力を修得する。研究者個人および研究に関わる集団としての研究倫理、生命を対象とした研究に関する倫理指針を理解するとともに、研究計画の立案から、研究資金獲得、データの取り扱い、共同研究、研究結果の発表に至る一連の研究活動について研究公正が求められる事項について理解する。これら知識を基盤として、大学・企業研究者の研究デザインの実例について学修して議論を深め、独立した研究者としての責任ある研究活動を実施していくための素地を培う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) 研究デザインの実例1～5は予定が前後する場合があります。 教員1 (塩見格一/全6回) 研究公正1～4, 研究デザインの実例4・5 教員2 (猪口徳一/全7回) ガイダンス、研究倫理1～3、研究成果の発表と公表、研究デザインの実例1・2 教員3 (米田誠/全2回) 研究倫理4、研究デザインの実例3</p>		
授業計画	第1回	研究デザイン特論ガイダンス（研究デザインに必要な要素、責任ある研究活動とは）（担当：猪口） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第2回	研究倫理1（研究者に必要な倫理的意思決定、歴史・事例から学ぶ）（担当：猪口） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第3回	研究倫理2（研究チームの構築と研究体制、集団としての研究倫理、ピア・レビュー）（担当：猪口） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第4回	研究倫理3（動物実験における生命倫理）（担当：猪口） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第5回	研究倫理4（ヒトを対象とした研究における研究倫理および指導者養成に関わる研究指導の在り方、遺伝子医療）（担当：米田） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第6回	研究公正1（研究計画、公的研究資金の獲得と適切な使用、クラウドファンディング）（担当：塩見） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第7回	研究公正2（データの取り扱い、統計処理）（担当：塩見） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第8回	研究公正3（企業との共同研究・利益相反）（担当：塩見） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第9回	研究公正4（研究における不正事例から学ぶ）（担当：塩見） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第10回	研究成果の発表と公表（発表の場、オーサーシップ、情報発信、パブリシティ）（担当：猪口） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第11回	研究デザインの実例1（健康増進に関わる解剖生理学的研究の実例について議論し学修する）（担当：猪口） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第12回	研究デザインの実例2（再生医療などの先進医療研究の実例について議論し学修する）（担当：猪口） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第13回	研究デザインの実例3（脳発達や脳機能に関する研究の実例について議論し学修する）（担当：米田） （事前・事後学修） 提示された課題に対する自己学習	
	第14回	研究デザインの実例4（医療工学的な研究開発の実例について議論し学修する）（担当：塩見）	

	<p>(事前・事後学修) 提示された課題に対する自己学習 第15回 研究デザインの実例5 (予防安全技術に関する研究開発の実例について議論し学修する) (担当: 塩見) (事前・事後学修) 提示された課題に対する自己学習</p>
テキスト	毎回資料を配布する。
参考書・参考資料等	科学の健全な発展のために-誠実な科学者の心得- 日本学術振興会 (https://www.jsps.go.jp/j-kousei/rinri.html)
学生に対する評価	講義中のディスカッションやグループワークなどへの取り組み (20%)、レポート (80%)
課題 (試験やレポート等) に対応するフィードバックの方法	在室時は随時対応します。メールでの対応も可能です。 講義中および終了時に適宜返答します。
備考	

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	2	専門科目 選択【博士後期課程】
担当教員			
林 浩嗣・小俣 直人・供田 文宏			
講義			
添付ファイル			

授業の到達目標及びテーマ	対象者の問題点を医学的観点から捉えるために必要な医学的診断技術を習得する。
授業の概要	<p>(概要) 対象者の問題点を医学的観点から捉える方法を学ぶ。対象者の障害を栄養管理学的観点、健康管理学的観点、精神科学的観点を通して診断する技術を理解する。栄養学的診断技術、生化学的診断技術、精神症状学に対する評価診断的技術を学び、対象者の生活を支援できる医療者となることを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (林浩嗣/全5回) 対象者の障害を栄養管理学的観点から捉え、栄養障害、栄養の基礎科学、栄養状態の評価、栄養管理について十分に理解したうえで栄養状態を正しく評価し、障害者の生活を支援できる医療者になることを目指す。</p> <p>(小俣直人/全5回) 精神症状学を十分に理解したうえで、生物学的な側面も併せて精神状態を正しく評価し、各精神障害者が社会に貢献していることを実感できるような支援を行える医療者となることを目指す。</p> <p>(供田文宏/全5回) 心血管系疾患(脳血管障害や心臓病)は、本邦の主要な死因であるとともに身体機能障害や寝たきり状態の要因である。講義では、生命予後の改善と要介護状態の回避を目的に、心血管系疾患の最大のリスク要因である生活習慣病を健康管理学的観点から捉え、主に評価診断的技術を学ぶことで生活習慣病の予防対策を立案することを旨とする。</p>
授業計画	<p>第1回 栄養障害(サルコペニア、フレイルなど) (林)</p> <p>第2回 栄養の基礎科学(林)</p> <p>第3回 栄養学的診断技術(林)</p> <p>第4回 栄養管理(林)</p> <p>第5回 総括と討論(林)</p> <p>第6回 こころの状態の捉え方:精神症状学(小俣)</p> <p>第7回 精神症状学および生物学的評価を踏まえた認知症の診断(小俣)</p> <p>第8回 精神症状学および生物学的評価を踏まえた内因性精神疾患の診断(小俣)</p> <p>第9回 精神障害者の就労の現状と課題(小俣)</p> <p>第10回 総括と討論(小俣)</p> <p>第11回 生活習慣病が心血管系疾患を発症するメカニズム(供田)</p> <p>第12回 生活習慣病におけるストレス反応の意義とその評価診断的技術(供田)</p> <p>第13回 生活習慣病における高血圧症の意義とその評価診断的技術(供田)</p> <p>第14回 生活習慣病における腎臓病の意義とその評価診断的技術(供田)</p> <p>第15回 総括と討論(供田)</p>
テキスト	特になし。毎回資料を配布する。
参考書・参考資料等	授業時に紹介する。
学生に対する評価	レポート50%、プレゼンテーション50%

課題（試験やレポート等）に対応するフィードバックの方法	在室時はいつでも対応します。メールでの対応もします。講義中および終了時に適宜返答します。
備考	

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	2	専門科目 選択【博士後期課程】
担当教員			
小林 康孝・川端 香・藤田 和樹			
講義			
添付ファイル			

授業の到達目標及びテーマ	対象者の問題点を神経生理学的側面から捉える方法を学ぶことで、対象者の病態理解を深め、生活を支援できる医療者となることを目指す。
授業の概要	<p>(概要) 視覚認知や注意や記憶などの認知機能の神経基盤を探るため、特に脳イメージングに焦点を当てた方法論と最新知見を学ぶ。さらに対象者の障害を、筋電図や動作解析の観点から学ぶことで、評価診断的技術の向上を図る。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (小林康孝/全3回) ニューロリハビリテーション総論、脳画像解析に必要な解剖、核磁気共鳴画像法 (fMRI) (川端香/全6回) 高次脳機能と脳画像、近赤外分光法 (fNIRS)、画像解析方法 (藤田和樹/全6回) 生体運動分析 (筋電図・三次元動作解析)</p>
授業計画	<p>第1回 ニューロリハビリテーション総論 (担当：小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第2回 脳画像解析に必要な解剖 (担当：小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第3回 核磁気共鳴画像法 (fMRI) (担当：小林) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第4回 高次脳機能と脳画像 (担当：川端) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第5回 近赤外分光法 (fNIRS) -研究デザイン・方法論 (担当：川端) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第6回 近赤外分光法 (fNIRS) -測定 (担当：川端) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第7回 画像解析方法 (担当：川端) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第8回 文献抄読 (担当：川端) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第9回 文献抄読 (担当：川端) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第10回 筋電図検査-測定手順 (担当：藤田) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第11回 筋電図検査-振幅と周波数の解析 (担当：藤田) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第12回 筋電図検査-シナジー解析 (担当：藤田) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第13回 動作分析-赤外線カメラによる三次元動作解析 (担当：藤田) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第14回 動作分析-慣性計測装置による三次元動作解析 (担当：藤田) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第15回 生体運動分析-最新知見と研究デザインの設計方法 (担当：藤田) (事前・事後学修) 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p>
テキスト	特になし 毎回資料を配布する。
参考書・参考資料	

等	
学生に対する評価	レポート 50% 口頭試問 50%
課題（試験やレポート等）に対応するフィードバックの方法	在室時はいつでも対応します。メールでの対応もします。講義中および終了時に適宜返答します。
備考	

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	2	専門科目 選択【博士後期課程】
担当教員			
堀秀昭、石田圭二、藤本昭、北川敦子、東伸英、保屋野健悟、堀敦志、近藤仁			
講義			
添付ファイル			

授業の到達目標及びテーマ	対象者の取り巻く環境を幅広くとらえ、その問題点を抽出し、その解決手段を身につける。さらに新たな技術開発について一連の過程を理解する。
授業の概要	<p>1. 対象者の問題点を生活支援の観点から捉える方法を学ぶ。対象者を取り巻く問題点は幅広く、社会保障の観点や、就職支援の観点、その対象者が社会に適応するときのインフォーマルな観点等、取り巻く環境を調査する手法について理解を深める。また対象者の問題点をとらえる手法として、物語（ナラティブ）に生活を評価し、対象者の生活を支援できる医療者となることを目指す。</p> <p>2. 対象者の生活の支援を目指すために、まず人々に起こっている問題の抽出の方法から、多分野（リハビリテーション学と看護学ならびに理学や工学、リハビリテーション関連機器）の学問領域との連携方法と新たな技術開発までの過程を教授する。問題の抽出に当たっては、学生主導で行い自ら考えだす力や、教員や他の受講者との対話から、事象を柔軟にとらえる力を養うことを目標とする。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （堀秀昭／全1回） 対象者を包括的にとらえ取り巻く問題点を抽出する方法について教授する （堀敦志／全1回） 対象者を包括的にとらえ取り巻く問題点を抽出する方法について教授する （石田圭二／全2回） 対象者の問題点をナラティブな手法について教授する （藤本昭／全4回） 就労支援を必要とする対象者の現状と課題を理解し、就労支援の制度・サービス等の実際について教授する （北川敦子／全6回） 対象者の生活の支援を目指し、看護理工学的手法を用い、問題の抽出からシステムおよび製品開発とその評価方法について教授する （東伸英／全3回） リハビリテーション関連機器の実践、その評価方法について教授する （保屋野健悟／全2回） インフォーマルなサービスについて教授する （近藤仁／全1回） 臨床で起こっている現象の疑問点を抽出する方法について教授する</p>
授業計画	<p>第1回 対象者を取り巻く社会保障制度を個別的（事例検証）に取り上げる方策について考察する（堀） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第2回 対象者を取り巻く社会資源を個別的（事例検証）に取り上げる方策について考察する（堀敦志） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第3回 対象者を取り巻くインフォーマルなサービスを個別的（事例検証）に取り上げる方策について考察する（保屋野） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第4回 就職支援制度についてその概要と方策（事例検証）について考察する（藤本） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第5回 就職支援にかかわる専門職の役割と支援の実際（事例検証）について考察する（藤本） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第6回 就職支援分野における専門機関との連携（事例検証）のネットワークの重要性について考察する（藤本） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第7回 生活障害をナラティブな手法を用いて理解する（石田） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第8回 第1～7回の中で起こった疑問、および臨床で起こっている現象の疑問点を抽出する（近藤、藤本、北川、保屋野、東） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第9回 生活障害に応じたリハビリテーション関連機器（発案から制作）（東） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第10回 生活障害に応じたリハビリテーション関連機器（制作からチェックアウト）（東） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p>

	<p>第11回 看護理工学的手法を用いた臨床研究の目的とプロセス（北川） （事前・事後学修） 授業の中で配布した資料に関する自己学習</p> <p>第12回 様々なアプローチ法と研究手法（北川） 生物学的アプローチ法や工学的アプローチ法の実際</p> <p>第13回 どのフィールドと連携したらよいかを考察する①（北川） その疑問は看護学領域で解決できるのか、できないのであれば工学系、生物学系など他分野との共同で解決できるのかをディスカッションする。また製品化をするのであれば、どの企業とマッチングしたらよいかにも言及する。</p> <p>第14回 どのフィールドと連携したらよいかを考察する②（北川） ディスカッションしながら疑問を解決する研究方法や企業との連携方法について考察する。</p> <p>第15回 製品の評価方法と社会への実装に向けての提言（北川） 臨床での評価研究方法および、技術開発がどのように社会に実装されていくかについて考察する</p>
テキスト	特になし 毎回資料を配布する。
参考書・参考資料等	なし
学生に対する評価	課題レポート100%
課題（試験やレポート等）に対応するフィードバックの方法	在室時はいつでも対応します。メールでの対応もします。 講義中および終了時に適宜返答します。
備考	

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
通年	1-3年	10	専門科目 必須【博士後期課程】
担当教員			
山口明夫、小林康孝、林浩嗣、小俣直人、供田文宏、堀秀昭、佐藤万美子、北川敦子、寺島喜代子、塩見格一、川端香、藤田和樹、猪口徳一			
演習			
添付ファイル			

授業の到達目標及びテーマ	各コースの講義、演習等で学んだ概念や理論、研究デザイン等の内容を踏まえ、研究遂行能力を養う。
授業の概要	研究指導教員の指導のもと、研究計画の立案・実施・解析・博士論文作成までの一連の過程を指導する。
授業計画	<p>授業の概要</p> <p>(山口明夫) 癌により日常生活や社会生活に制限を受ける患者の、病態解釈に関する基礎研究や、生活再構築から社会復帰へ向けての包括的なアプローチの実践に関する研究指導を行う。</p> <p>(小林康孝) 中枢神経疾患に伴う運動障害や高次脳機能障害を有する患者が、自立した日常生活を送り、安全性・生産性をもった社会活動を営むために必要な、新しい医療技術の開発や支援体制の確立に関する研究指導を行う。</p> <p>(林浩嗣) 脳血管障害、神経変性疾患、認知症などの中枢神経疾患により障がいをもった者の栄養状態を調査し、身体機能や日常生活動作の維持に寄与するようなりハビリテーションに関する研究指導を行う。</p> <p>(小俣直人) 精神障がい者が、社会への貢献も含めた自立的な生活を送れるようになる実践的な取り組みについて、精神疾患に関する生物学的あるいは精神病理学的な視点も鑑みながら立案し、本学および関連機関にて実施する。データを収集し、分析・考察して論文作成の指導を行う。</p> <p>(供田文宏) 近年増加の一途を辿る生活習慣病の予防と克服のため、地域を拠点とした生活習慣改善の取り組みと実践について、研究計画に基づき、データ収集・分析・考察して論文指導を行う。</p> <p>(堀秀昭) 障がいを持った者が社会に戻るための環境を調査し、身体機能の維持・向上、健康寿命の延伸に寄与するような支援方法や社会資源の活用に関する研究指導を行う。</p> <p>(佐藤万美子) 脳血管障害による身体障害者や高次脳機能障害者が、入院生活から社会へ戻り、さらには職業復帰するにあたり障壁となる要因を科学的に分析し、それに対する新しい支援技術を開発する研究指導を行う。</p> <p>(北川敦子) 創傷関連に起因する健康障害を主軸に置きながら、慢性疾患など生活に影響をもたらす疾患をもつ対象者とその家族が積極的な社会参加を実現するための新しい支援策の開発から臨床評価、さらにこのエビデンスを用いた実装研究に関する指導を行う。</p> <p>(寺島喜代子) さまざまな健康障害や機能障害を有して病院や高齢者施設、在宅などで過ごす高齢者の健康支援や家族、職員が直面する課題などに関して、文献検討を重ねて自己の研究疑問を明確化し研究計画を立てる。倫理審査の承認を得て、データ収集・分析・考察といった論文作成の過程を指導する。</p> <p>(塩見格一) パソコンやタブレット等を利用した一般的な、また独自のパフォーマンステスト及び、音声分析技術を利用した疲労及びストレスの定量化技術の研究開発を基に、障がい者を含む被験者の日常生活における様々なワークロードの分析とその低減に関する研究指導を行う。</p> <p>(川端香) 後天性脳損傷による高次脳機能障害を有する患者を対象とし、病態解釈に必要な脳機能に関する基礎研究や、自己認識の促進と社会生活の改善に寄与するよう新たなリハビリテーションの開発に関する研究指導を行う。</p> <p>(藤田和樹) 神経疾患を有する患者や虚弱高齢者の運動機能障害に対して、生体運動解析を基盤に障害構造を解明し、根拠に基づく予防・治療法の考案および開発に関する研究指導を行う。</p> <p>(猪口徳一) 人体の発生と発達の仕組みについて、最先端の知識と研究技術を修得し、それを基盤として独創性の高い基礎医学研究を推進できる研究者の育成を行う。生化学的解析、遺伝子発現データ解析、遺伝子操作技術などを用いて未知の生体システムを研究することで、エビデンスに基づく医療の推進や、再生医療に向けた新たな生体機能の解明に関する研究指導を行う。</p> <p>授業計画</p> <p>特別研究の考え方 独立して研究できる能力を身に付け、創造的、独創的な研究を行うことで、保健医療学分野への貢献を期待できる成果を得る。 授業の内容としては、主に研究指導教員から研究の遂行に必要な助言・指導を受ける</p> <p>1年次前期 30時間 1) 研究課題を、文献検討により明確にする(4~6月)</p>

	<p>2) 明らかになった研究課題に適する研究方法論を学習し、その方法を習得する (6～9月) 1年次後期 30時間</p> <p>3) 研究計画書を作成し、必要に応じて倫理審査委員会の審査を受ける (9～11月) 4) 研究計画に基づく調査・実験等を実施する (11月～3月) 2年次前期 60時間、後期 60時間</p> <p>5) 指導教官の指導の下、修正・追加を行いながら調査・実験等を継続する 3年次前期 60時間</p> <p>6) 中間発表会を実施する (4月) 7) 中間発表会での指導を踏まえ、調査・実験等に修正を加え継続する (4月～8月) 8) 調査・実験結果を分析・考察し、目的に沿った結論を導き出す。また、医療に貢献しうる新しい知見を見出す (8月～9月)</p> <p>3年次後期 60時間</p> <p>9) 研究プロセスを論文にまとめる (9月～1月) 10) 博士論文提出及び最終試験 (1月～2月) ※各指導教員と個別に相談のこと 研究の遂行に必要な文献収集・データ収集・分析・論文作成等の作業は、授業時間外に行う場合がある。</p>
テキスト	資料配布
参考書・参考資料等	他、講義時に紹介する
学生に対する評価	研究計画書作成や研究の実施状況、博士論文の内容、研究への態度等に基づき、研究指導教員が総合的に評価する。尚、本学博士修士論文としての承認決議は、論文審査員による審議を経て最終的に研究科会議で決定する。
課題（試験やレポート等）に対応するフィードバックの方法	各自教員と相談のこと
備考	